

はじめに

「まあ！ かわいそうに。こんなものでお話を聞かされるなんて！」

8月のある日、子どもたちと本をつなぐ団体の全国大会で、わいわい文庫を展示していた我々に投げかけられた言葉です。まだ電子図書に対する認識は、その程度の人が多いのかもしれない。

さて、昨年1月、特別支援学校に通う中学1年生の女の子から、「百人一首を楽しみたいので、電子化してもらえませんか」というお願いがありました。彼女は脳の障害のために、本や札を自分で手にとることが困難です。そこで『小倉百人一首』を今回の作品に加えました。

詠みは音訳者に加え、都立特別支援学校に通う中高生にお願いしました。全盲の中学生が点字をたどりながら、一生懸命に読み上げる姿が特に印象的でした。また歌の情景がわかりやすいように、都立高校10校に依頼し、美術部などにオリジナルの情景画を描いてもらいました。札のデータは任天堂株式会社が無償で提供してくださるなど、大勢の人の力を集めてひとつの作品を仕上げました。

そのほかにも、各地の民話などを集録する『日本昔話の旅』には、県立図書館10館が協力してくださいました。それぞれに地元の高校生や紙芝居の団体、市立や点字図書館など多くの方が参画しています。ほかにも著作者や出版社、音訳者や校正ボランティアの皆様など、今回のわいわい文庫のCDにも、大勢の人の心がぎゅっとつまっています。

また、障害のある子どもたちの読書環境の現状と支援方法を、市民の皆様へ学習機会として提供している『読書バリアフリー研究会』は全国8か所で開催し、過去最高の412名の方にご参加いただきました。障害のある子どもたちを読書に誘おうという輪は、少しずつですが着実に広がっていることを感じています。

「本を持つことができない」「字が小さすぎる」「漢字を読むことが難しい」など、紙の本を読むことができない理由は様々です。本冊子の報告に、「わいわい文庫（マルチメディアDAISY規格）は、自分の力で読んでいるという実感が持て、自己肯定感を育むことに役立っている」「自分で字は読めないが、集中してお話を楽しむことができている」という内容の記述がありました。電子図書だから自分のペースで読書を楽しめる子どももいます。紙の本と電子図書は、すべての子どもが読書を楽しむために、補完しあう関係なのです。

子どもたちの手元に作品を届けるのが人の力であるならば、届ける障害になるのも人。

私たちの役割は、わいわい文庫を提供するだけでなく、障害のある子どもへの理解を広げ、一人でも多くの人の力を結集して、読書環境の改善に努めることにあるようです。

2017年3月

公益財団法人伊藤忠記念財団